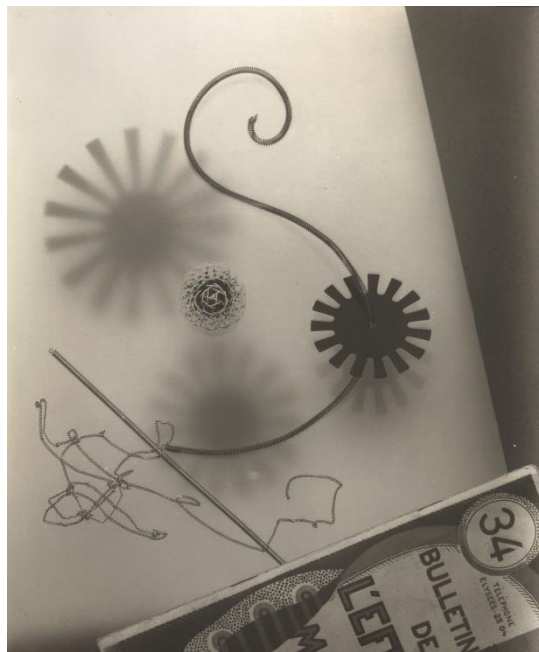


『光画』と新興写真 モダニズムの日本

The Magazine and the New Photography: *Koga* and Japanese Modernism

2018年3月6日（火）～5月6日（日）



左) 木村専一 〈フォトアウゲ〉より 1931年
右) 中山岩太 《……》1932年 中山岩太の会蔵

か
う
し
た
作
品
も
藝
術
で
は
な
い
だ
ら
う
か
？

『新興写真研究1』（1930年）より

展覧会概要

本展は1930年前後に日本の写真史において盛んとなっていた新興写真に注目した展覧会です。新興写真とは、ドイツの新月主義（ノイエザッハリヒカイト）やシュルレアリスムなどの影響をうけ、それまでのピクトリアリズム（絵画主義写真）とは異なり、カメラやレンズによる機械性を生かし、写真でしかできないような表現をめざした動向です。

『光画』とは1932年から1933年までわずか2年足らずしか発行されなかった写真同人雑誌です。主宰者である野島康三、同人であった木村伊兵衛、中山岩太を中心に関西（浪華写真倶楽部、芦屋カメラクラブなど）のアマチュア写真家をも巻き込み、新興写真を牽引しました。ジョン・ハートフィールド、エドワード・スタイケン、ウジェーヌ・アジェなど外国人作家の作品紹介から、フランツ・ロー、ラースロー・モホイ＝ナジの論文の翻訳など、海外の情報も掲載し、第2号から同人として参加した、評論家の伊奈信男が創刊号に掲載した「写真に帰れ」は、日本近代写真史を代表する論文として知られています。

また1930年には雑誌『フォトタイムス』の編集主幹であった木村専一を中心に「新興写真研究会」が結成され、堀野正雄、渡辺義雄などが参加しています。わずか3号ですがこの研究会の雑誌も発行されました。今回はこの二つの雑誌に掲載された写真を中心に、新興写真に影響を与えた海外写真家の作品とその後の写真表現を展覧いたします。

日本では戦後の主流となったリアリズム写真表現と相反する部分も多かったために、注目される機会が限られていました。しかしさまざまな実験や工夫があり、その後の広告表現やリアリズム写真にも影響を与えています。幅広い豊かな写真表現をご堪能下さい。

出品予定作家

野島康三、中山岩太、木村伊兵衛、ハナヤ勘兵衛、佐久間兵衛、堀野正雄、吉川富三、安井仲治、大東元、錦古里孝治、岡野一、堀不佐夫、高麗清治、ラースロー・モホイ=ナジ、ウンボ ほか

主な出品作品

本展では1930年代前半～後半の、戦争の足音が刻々と近づいてくる時代に、センセーショナルに登場した新しい写真の表現を、つまびらかにご紹介します。(出品予定点数 約150点)

1 『光画』全18号より

～作品発表から海外情報まで、時代をリードした写真アート誌～

プリント作品49点、『光画』より39点、資料展示

写真同人雑誌『光画』（全18号、1932-33年発行）には、新興写真をリードした作品計150点が紹介されています。本展では、野島康三、木村伊兵衛、中山岩太の作品をはじめ、現存するプリント作品49点の展示や、美しくデザイン・印刷された表紙の展示などによって、『光画』の全貌に迫ります。



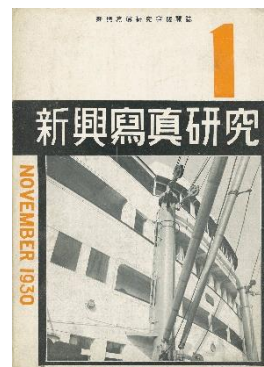
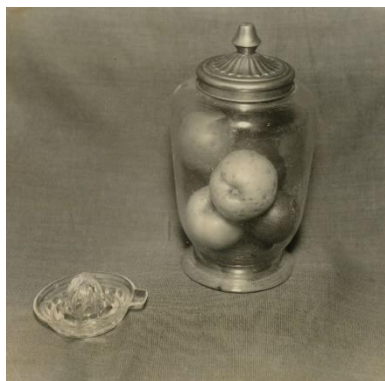
1) 『光画』第一巻第一号 1932年 聚楽社 2) 佐久間兵衛《(ビル)》『光画』第二巻第三号 表紙 1932年頃 3) 佐久間兵衛《汽船》1932年頃 4) 岡野一《顔》1932年頃 5) 中山岩太《……》1933年 6) 佐久間兵衛《……》1932年頃

2 『新興写真研究』全3号より

～わずか3号で終焉をむかえた、幻の写真誌が登場～

全点プロジェクション展示、プリント作品4点、資料展示

新興写真研究会（会員数約300人）の会報誌『新興写真研究』（1930-31年発行）は、1930年11月から3号だけ発行され、発行部数も希少なことから、まさに幻の存在でした。本展では本年度、当館のコレクションとなった本誌の現物を展示するとともに、掲載されている49点の作品を全点プロジェクション展示します。現存する木村専一、古川成俊のプリント作品4点も紹介します。



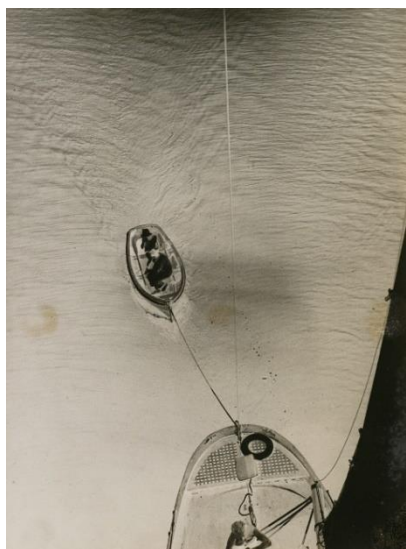
左) 木村専一〈フォトアウゲ〉より 1931年 中) 古川成俊 《モンターチュ》 1931年 右) 『新興写真研究1』 1930年

3 独逸国際移動写真展 より

～ドイツの写真展が、日本にやってきた！～

プリント4点 ほか

独逸国際移動写真展は、1931年に東京と大阪で開催された写真展です。1929年にドイツのシュトゥットガルトなどで開催された「Film & Foto」展の写真部門だけを巡回したもので、村山知義（小説家・画家）と山内光（本名：岡田桑三、俳優・映画プロデューサー）が日本に紹介しました。展覧会カタログとされる『foto-auge（フォトアウゲ）』と掲載されている作品よりプリント4点を紹介します。



左) ラースロー・モホイ=ナジ 《ボート》 1927年

上) ヴォルター・フンカート 《ガラス玉》〈ポートフォリオ6〉より 1929年

4 木村専一コレクションより

～日本の作家に影響を与えた、海外名作の数々～

プリント 22点 ほか

日本の新興写真に影響を与えた海外作品として、雑誌『フォトタイムス』（オリエンタル写真工業発行、1924-41年）編集主幹であった木村専一が、1931-32年にヨーロッパとアメリカで手に入れた作品を紹介します。

木村専一コレクションとは？

当館の開館準備時期に、木村専一の子息・正氏より購入と寄贈をうけた作品のことで、現在、127点を収蔵している。この中には欧米の著名な写真家である、マン・レイ、ラースロー・モホイ＝ナジなども含まれている。当館の貴重なコレクションとして、展示されてきた作品も多いが、数人の作品については作家情報が不明であった。2014-16年のリニューアル休館中の調査により、多くの情報が明らかになっている。日本の写真界がどのような形で、欧米の写真から影響を受け、受容されていったのかを理解するうえで重要なコレクションである。



- 1) ウンボ 《同時的ポートレート》 1928年
- 2) リー・ミラー 《手》 1931年
- 3) イヴァ 《オブジェ》 1920～39年
- 4) リー・ミラー 《ポートレート》
1920～1940年

木村専一（1900-1938） （写真家／写真誌編集者）

- | | |
|----------|---|
| 1923年 | オリエンタル写真工業に入社 |
| 1924年 | 写真雑誌『フォトタイムス』創刊。編集主幹となる |
| 1929年 | 5月号から新コーナー「モダン・フォトセクション」で欧米の写真動向を紹介 |
| 1931-32年 | 山田英吉（生没年不詳）、中山正一（1891-1950）、安本江陽（1889-1944）と渡欧・渡米 |
| 1931年 | 2月号から「欧米視察旅行記」を『フォトタイム』にて全28回連載 |
| 1933年 | オリエンタル写真工業退社 |
| 1934年 | 10月に武蔵野写真学校設立 |
| 1938年 | 38歳で早世 |

5 1930年代後半へ 広告／報道／前衛写真

～しのびよる戦争、写真は新たな役割をになう～

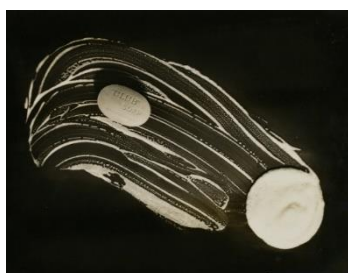
1930年代後半になると、新興写真の表現は新たな広がりを見せていきます。広告に写真が使われ始めたのもこの頃です。日本人ならではのクリエイティブなセンスは、現代の私たちにも新鮮です。

『光画』の活動と平行して、伊奈信男や木村伊兵衛は、名取洋之助とともに日本工房を設立し、対外宣伝誌『NIPPON』を創刊します。伊奈、木村はのちに中央工房を設立し、東方社として対外宣伝誌『FRONT』を創刊します。写真は、戦中の国内外の宣伝活動を支えていきました。

前衛写真は新興写真の活動が急速に分散していくなかで、シュルレアリスムや抽象絵画の影響を受け、関西の「浪華写真倶楽部」や中京の「ナゴヤ・フォト・アヴァンガルド」、東京の「前衛写真協会」などが中心となり、写真にさまざまな手を加えた実験的な作品をつくりだしていきました。



上) 中山岩太 《福助足袋》 1930年



左上) 小石清 《クラブ石嶮》 1931年



左下) 木村伊兵衛 《満州・葛根廟》 1940年



右下) 椎原治 (縞馬) 1938年頃

関連イベント

トーク① 「新興写真とはなんだったのか」

2018年3月17日(土) 14:00～16:00

パネラー 谷口英理 (国立新美術館 学芸課美術資料室長)

松實輝彦 (名古屋芸術大学准教授)

光田由里 (美術評論家)

司会 藤村里美 (東京都写真美術館学芸員)

定員 190名 (整理番号順入場／自由席)

会場 東京都写真美術館1階ホール

トーク② 「『光画』について」

2018年4月22日(日) 14:00～15:30

講師 飯沢耕太郎 (写真評論家)

定員 50名 (整理番号順入場／自由席)

会場 東京都写真美術館1階スタジオ

① ②とも入場無料／要入場整理券 *当日10時より①1階受付／②1階ホールにて整理券を配布します。

担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第1、第3金曜日14:00より、担当学芸員による展示解説をおこないます。観覧会チケット（当日消印）をご持参の上、3階展示室入口にお集まりください。

*事業はやむを得ない事情で変更することがございます

開催概要

主催 東京都 東京都写真美術館／読売新聞社／美術館連絡協議会

協賛 ライオン／大日本印刷／損保ジャパン日本興亜／日本テレビ放送網

会場 東京都写真美術館 3階展示室

東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

Tel 03-3280-0099 URL <http://topmuseum.jp>

開館時間 10:00～18:00（木・金は 20:00 まで）入館は閉館 30 分前まで

休館日 毎週月曜日 ※ただし、4月30日（月・振休）、5月1日（火）は開館

観覧料 一般 700 (560)円／学生 600(480)円／中高生・65歳以上 500(400)円

※（ ）は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方と

その介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。

掲載をご希望の際は、下記広報担当まで連絡ください。

なお、掲載点数が1点の場合は、観覧会メインイメージとして、本リリース1ページ目の

木村専一 〈フォトアウゲ〉より 1931年頃 ゼラチン・シルバー・プリント

もしくは 中山岩太《……》1932年 中山岩太の会蔵 をご提供させていただきます。

このリリースに掲載されている作品のうち、記載のないものは東京都写真美術館蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。

図版のトリミングはできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館

1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

観覧会担当 藤村里美 s.fujimura@topmuseum.jp 関次和子 k.sekiji@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp